157
107

紀元二千五百九十二年版

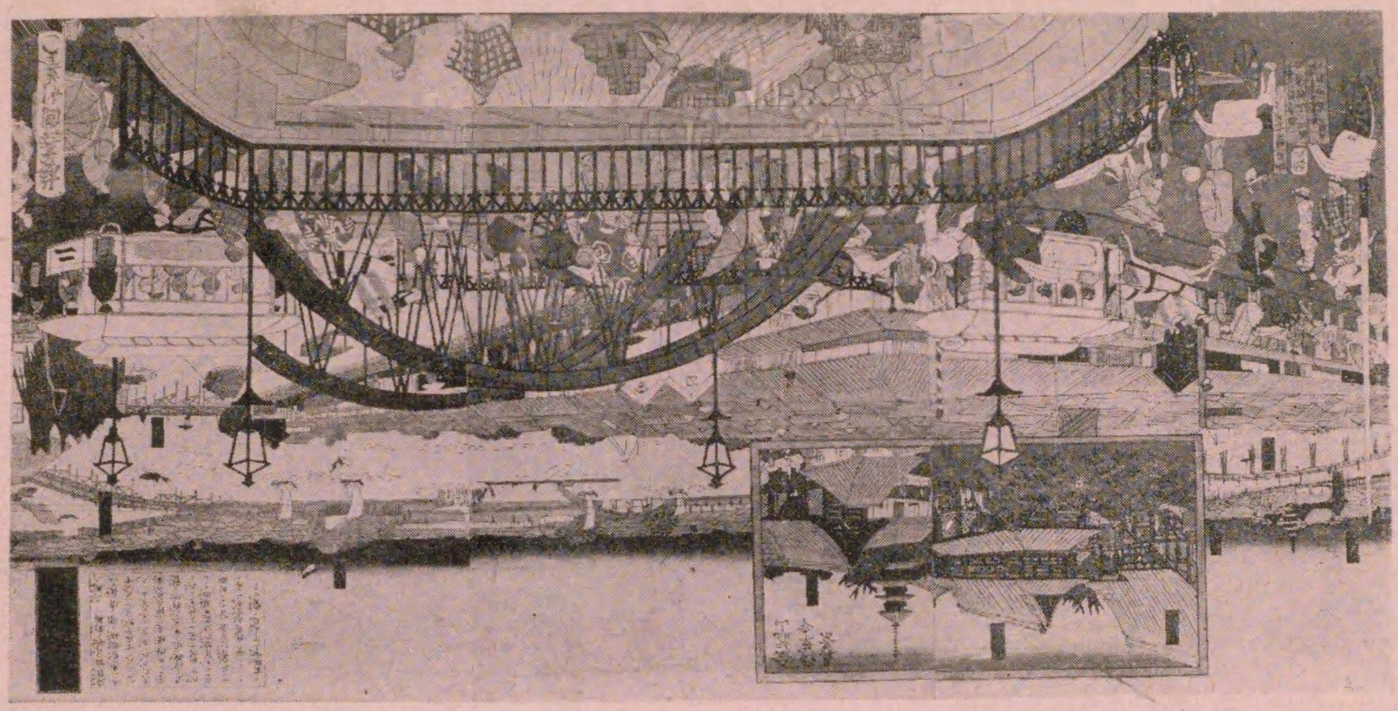
奥山

第十七

奥山會刊行

磯谷紫江氏寄贈本

一千二百年祝觀世音開帳三枚續一 廣重畫



一淺草藝風景一國利畫

諸國名所百景・東都淺草花盛

東京淺草橋之風景

梅壽國利摹

淺草橋ハ弓形ノ釣橋ニテ高欄ノ外ハ悉皆鍛鉄ヲ用ヒ橋ノ長サハ八十六尺二寸五分幅ハ三十一尺六寸其内中央ノ車道十九尺左右ハ人道ナリ此橋ノ構造ハ工師長原口要君ノ指授ニ依リ東京赤羽根ニテ製作セリ明治十五年十一月此工事ヲ起シ同十七年一月竣工シ同廿九日開橋セラレタリ此入費ハ二万五千三百七十八圓餘ナリシトゾ實ニ我國未曾有ナル所ニテ其堅牢ナル

ヿ人目ヲ驚セリ

四月十日
十一日
十二日

書画展観　古物縦覧

席上揮毫　餘興數種

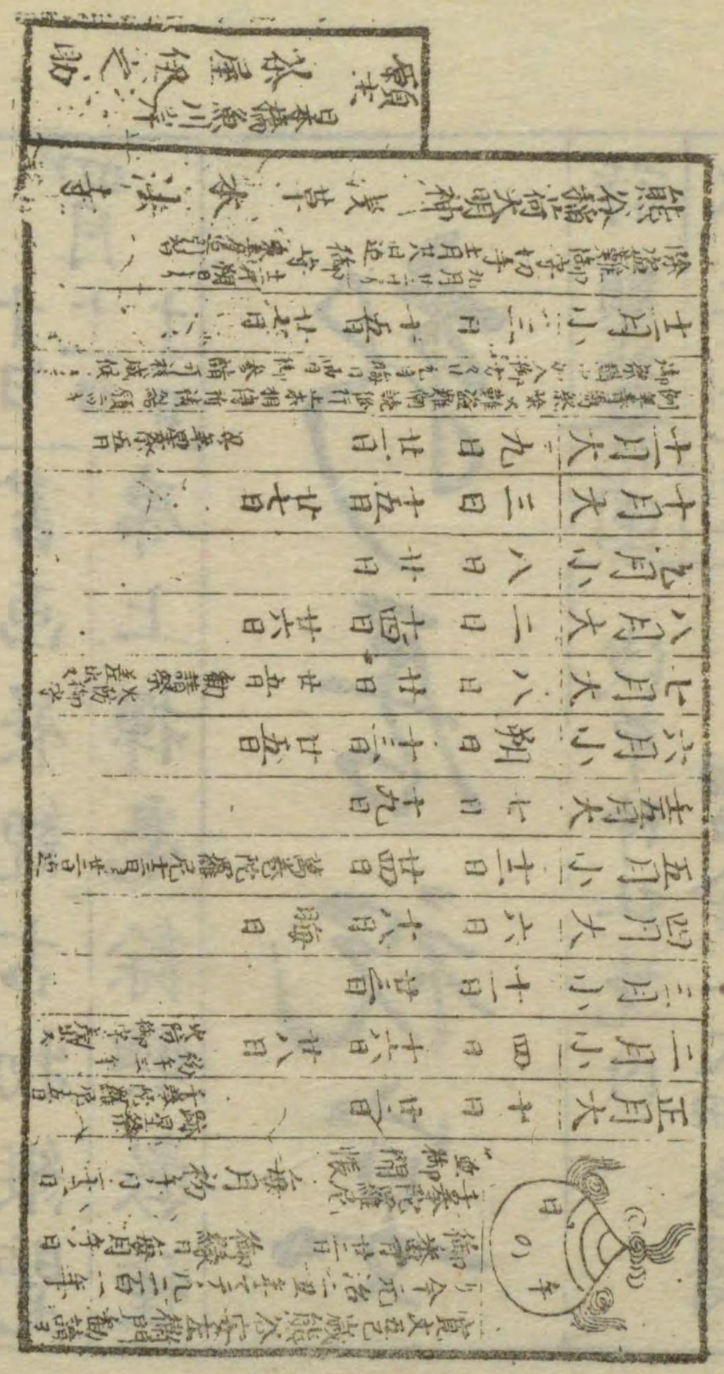
新居祝宴

詩題繞花園

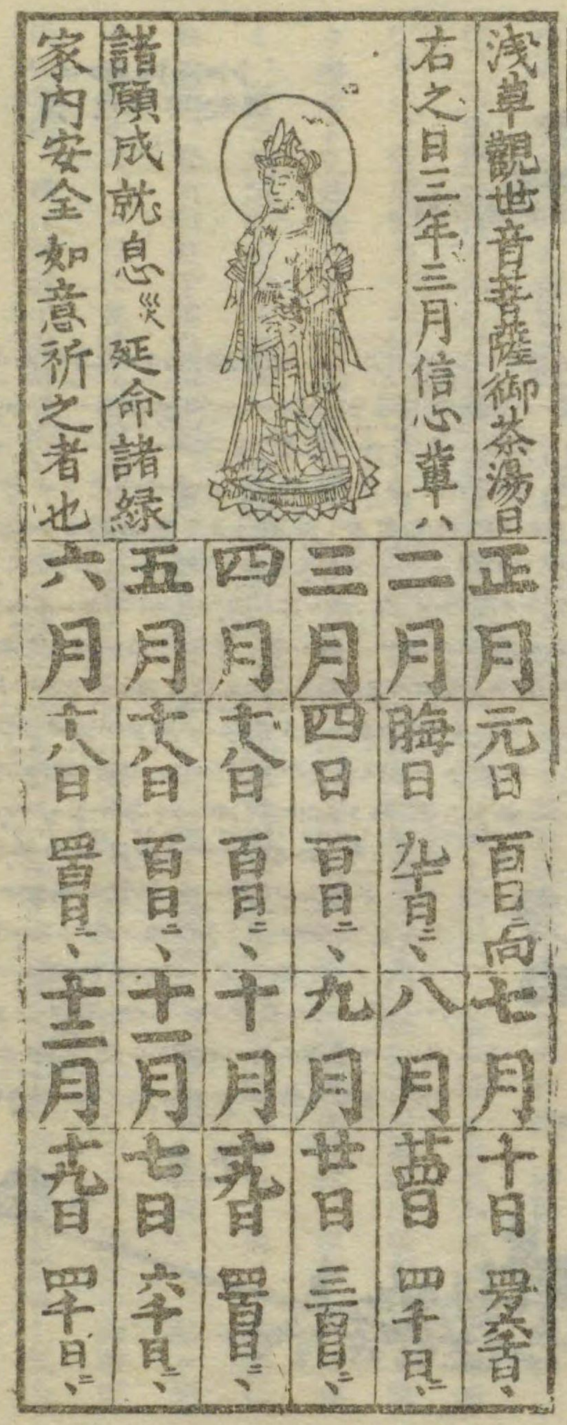
歌寄花祝

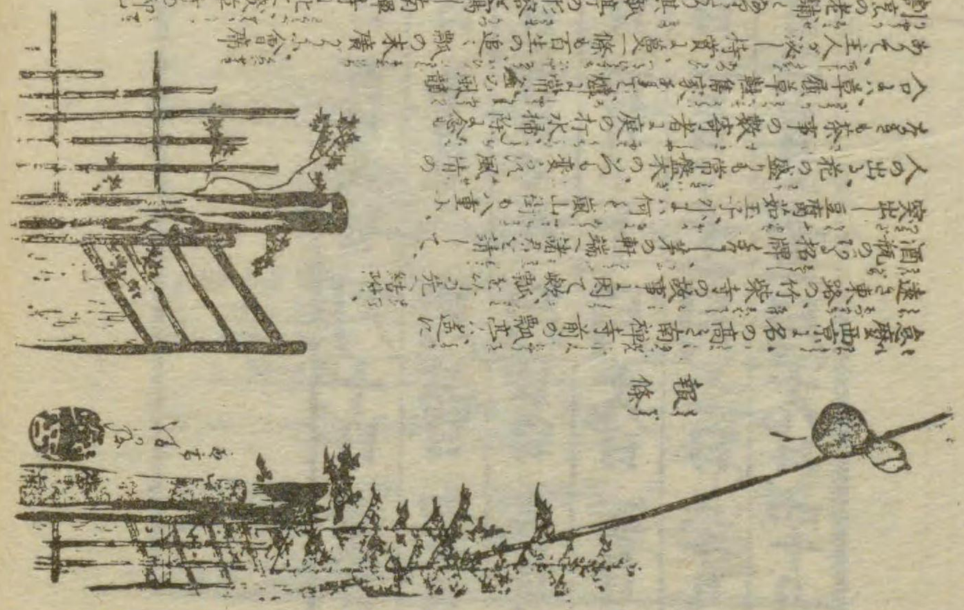
浅草神社境内

櫻舍　大畑春國



正月大	二月小	三月小	四月大	五月小	六月大	七月小	八月大	九月小	十月大	十月大	十一月大	十二月小
一日	十日	十一日	十二日	十三日	十四日	十五日	十六日	十七日	十八日	十九日	二十日	二十一日
二日	十一日	十二日	十三日	十四日	十五日	十六日	十七日	十八日	十九日	二十日	二十一日	二十二日
三日	十二日	十三日	十四日	十五日	十六日	十七日	十八日	十九日	二十日	二十一日	二十二日	二十三日
四日	十三日	十四日	十五日	十六日	十七日	十八日	十九日	二十日	二十一日	二十二日	二十三日	二十四日
五日	十四日	十五日	十六日	十七日	十八日	十九日	二十日	二十一日	二十二日	二十三日	二十四日	二十五日
六日	十五日	十六日	十七日	十八日	十九日	二十日	二十一日	二十二日	二十三日	二十四日	二十五日	二十六日
七日	十六日	十七日	十八日	十九日	二十日	二十一日	二十二日	二十三日	二十四日	二十五日	二十六日	二十七日
八日	十七日	十八日	十九日	二十日	二十一日	二十二日	二十三日	二十四日	二十五日	二十六日	二十七日	二十八日
九日	十八日	十九日	二十日	二十一日	二十二日	二十三日	二十四日	二十五日	二十六日	二十七日	二十八日	二十九日
十日	十九日	二十日	二十一日	二十二日	二十三日	二十四日	二十五日	二十六日	二十七日	二十八日	二十九日	三十日
十一日	二十日	二十一日	二十二日	二十三日	二十四日	二十五日	二十六日	二十七日	二十八日	二十九日	三十日	
十二日	二十一日	二十二日	二十三日	二十四日	二十五日	二十六日	二十七日	二十八日	二十九日	三十日		
十三日	二十二日	二十三日	二十四日	二十五日	二十六日	二十七日	二十八日	二十九日	三十日			
十四日	二十三日	二十四日	二十五日	二十六日	二十七日	二十八日	二十九日	三十日				
十五日	二十四日	二十五日	二十六日	二十七日	二十八日	二十九日	三十日					
十六日	二十五日	二十六日	二十七日	二十八日	二十九日	三十日						
十七日	二十六日	二十七日	二十八日	二十九日	三十日							
十八日	二十七日	二十八日	二十九日	三十日								
十九日	二十八日	二十九日	三十日									
二十日	二十九日	三十日										
二十一日	三十日											
二十二日												
二十三日												
二十四日												
二十五日												
二十六日												
二十七日												
二十八日												
二十九日												
三十日												





東京名所

東京淺草花馬道
写主 横町田甫の角

河竹黙阿弥

報條

愈〻西京に名の高き、南禪寺前の瓢亭は遙に遠き東路の、竹柴寺の故事に因て歟、瓢を竹の先へ結附酒瓶のある招牌となし茅の軒端へ諸君を請じて、突出し豆腐茹玉子、外には何も嵐山街も八重に人の出る、花の盛りも常盤木の、いつも變らず風情のなきも茶事の數寄者に庭の打水、掃除に念も入口には、草履草鞋舊家あれど、爐に常釜の風韻ありて、主人が泌し持賞に、蔓一條も百生の追々瓢の末廣がりに、會席割烹の老舗になりたり其瓢亭の形容を寫し南禪寺に比て、淺草寺の御山の後、往來も繁き馬道より外繫めきし紺屋の張場を、すこし放れし田の方へ田舍家造りに家居を補理、楳咲頃の出來も、何や茅屋の普請に暇取、一重櫻ともろともに、枝折戸開く庭入口田畑を隣に市中と異り、藪鶯に蛙の聲、青田の螢千種の虫の音、池に照そふ月の夕、梢に積る雪の朝は、殊更詠も吉原から、忍ヶ岡の山をかけ、一目に見晴す田家の眺望、他と異るは一聞毎に、懸置額や軸にもとづき、神道の鈴淨圖氏の金鐸、或は銅鈸子雲盤なんど、一寸お爛のお代り目に、拍手のお手を鳴さず有合ふ鳴器鳴し玉らへば、早速參りて御給仕なし、諸事瓢亭に效へども料理は轉じて東京風に、風味を專一庖丁なすは、年

頃手馴し芝居茶屋、そこらに如才は中田甫、冨士横丁から門に出し、瓢を目的に田舎家へ、四時替らず御來駕あるやう、主人に代て同芝居の小作男が冀ふになん

河竹其水 印

東京淺草北馬道
冨士横町田甫の角
東瓢亭

來ル如月十八日見世開
三日の間龕景呈上

贈大教正

玉垣道守彦靈

俗姓名

行年六十六歳　堀越秀

相州茅ヶ崎松林村小字濱須賀於孤松庵

明治三十六年九月十三日午後三時四十五分死去ス

青山共葬墓地へ埋葬ス

團十郎記念燐票

後苑莊消息

四月二十日。 墓蹟漫談會の短册を、川島樓上にて揮毫する。

四月廿一日。 漫談會、出席者十六名、新顔に俳人の加藤紫舟、冨士の家としを、大岡英太郎の三氏。

四月廿二日。 千葉氏を訪ふ。

四月廿三日。 夕五時十五分上野發にて、白河へゆく（本誌第十四記事參照）

四月廿五日。 孤村氏來莊。川島氏をたづねる。

四月廿六日。 午後四時六分品川驛より、廣河原にゆく（本誌第十三記事參照）

四月廿八日。 一番にて廣河原よりもどる、夜永江氏を訪づれ、序で千葉氏を訪づれる。

四月廿九日。 十一時ごろ、一行六人自動車にて柴又の帝釋天へゆく、一旦もどり休息後歸莊。

四月三十日。 先日のことにて氣分をそこね、騷擾にたえず、三時すぎ寢につく。

五月一日。 城南にて、日暮里驛へ駈せつけ、佐原へゆく（本誌第十六記事參照）

五月二日。 三木氏をたづねる。高野氏へ送る短册二十二枚揮毫する。

五月三日。 拓川老をたづね、藪忠に立ち寄り歸莊後、和泉へ行違ひとなり、和泉通りにて出逢ひ、十二時過迄語る。

五月四日。 川島へ、石黑より出かける、柳川にて夕飯をとる。

五月五日。 南崖滿州移住記念句會へ一寸顔を出す歸莊後、永江氏を訪ひ不在、邦文舍より、西小山の『七福』へ雲水會例會に出席、會者九名。

五月六日。 奥平氏を訪づれて、夜十一時すぎとなる。

五月七日。 辛美會へ出席。二三惠さん萬世橋驛まで來てもどる。三木氏をたづねる。

五月八日。 終日雨。

五月九日。 邦文舍に立ち寄る。孤村氏來莊。

五月十日。 早朝、加藤氏、夜孝治來莊。

五月十一日。 加藤氏を訪れ、川島へ夜雨となる。

赤塚行

＝五月二十五日＝

イツモ早い方で、發車まへ十分しかないのに、マダ二人しか姿が見えない。長瀞行の團体や、臨時電車が、出るので、どの電車も十分や、二十分遲れ勝ちになり、時間表などは、あつてもなくてもよいやうだ。この定刻の電車も、どれがどうやらわからず、時刻になつて行かれる、電車なら、乘つてやらうと云ふ氣にもなる。そのうち皆さんが、お見えになり、電車の後半は、どこかの學校の團体が乘りこんだ、トデモ坐ろなンて贅澤は出來ないことだ、そうながいこともない、十五分か廿分で、降りることになるのだ、この線に自分が乘つた頃には、下赤塚驛などはなく、また途中にも驛が大分殖えてゐた樣だ。

大堂にゆく道々に、細長い杭棒にお宮があり、また、石造のお宮などが見えた、これは榛名神社のお符を頂いたものを、ここへ納めてあるやうに見受けられた、大堂の梵鐘はいつみてもあかない、鐘樓である。暦應の鐘の手ざわりもよい、撮影に、永江さんの手を煩したが、結果はあまりよくなかつた。足場がなかなか骨がおれた。堂後の夫婦欅の老木も珍らしい、泉福寺に廻つて、松月院にゆく一行は本堂に上つたが、私と寂星庵君は、皆さんが寺寶でも見てゐる間に、安樂寺に先廻り途中、駄菓子を頬張つ

て中食のかはりになし、寺内で鐘樓と、板碑の拓本と撮影をした。住職は撮影について、なにくれとなく世話をやいて下さつた。

急いで、私たけ松月院に戻つてみると、どなたの姿も見えない、本堂の側でお茶をシネツテゐる方に聞いても知らぬと云ふ。境内の柵をつくつてゐる植木屋に聞いてみると、畑を拔けて一行の一部は、赤塚城阯へ、他は德丸原調練阯へゆかれたと云ふ。

とにかく、寂星庵かもどつてからにすることにして、境内の記念碑の碑文をうつしたのら、表通りに出て、寂星庵を迎へにゆく、交番の脇でやや久しくまちうけていると、一行の一部が、德丸原調練阯からもどつてきた、先頭は矢吹先生であつた。一行六、七名は、諏訪神社(田樂祭で有名である)を參拜して役場の脇の『赤塚』を見學するので、この途を取られたやうだ、他は、直行して志村の方へ行かれたと云ふことである。我等一行は、赤塚役場で休憩をした。而して『赤塚』をも撮影した、役場の印を蒐印するここでまた特殊の方は、志村の方へ廻ることになり、その他の方は、下赤塚驛からもどられた。

志村の圓福寺で、賣られんとした梵鐘と、貞和六年、延德元年の板碑二基の拓本をとり、矢吹先生は太田道灌茶室用と云ふ古雲版の手拓にいそがしい。

志村城阯は今は小學校の敷地となり本丸跡は運動場となり、大手と思はれる處の土壘の一部が殘り、空濠もよく保存されてゐる。城内に古墳があり、その上に鄕社熊野神社が勸請されてゐる。境内で、大正八年に發見された、大永六年、明應元年、永正十三年の板碑を撮影する。

それから村役場の前を通つて、延命寺に詣る、寺で聞けば、足の惡い本間鶴水さんは、息子さんに連れられて、ここまでこられたと聞いて、その勇氣におどろいた。境内にも板碑があり、この附近の寺々には、澤山板碑があるやうに聞いた。

志村一里塚の右の塚上の榎は枯死して、無慘にも伐倒されたところを見て、おそろしい世の中であるとおもつた。これては、指定史蹟も糞もあつたものでない。こんな亂暴な話もなくこんな例は他には見受けないやうだ。管理者である村の當局者の考へないにもあきれたものだ。これで、史蹟でございとはおそれ入つたもの、よろしく史蹟は取消した方がましだらう。

これで見學も終りを告げたので、バスに乘つて板橋に出て、市電に乘り換へ、省線巢鴨驛前でおりる一行は驛前の泡盛屋にゆかれ、自分甘黨はここで失禮させて頂いた。(終)

墓蹟漫談會記

六月十七日(金曜日)曇天、午後六時から第二十四回例會が瀧野川町中里藪忠日月庵で開催されました。定刻前既に御參著の三四位、引續き出席總員十七君。小雨催ひの中をお運ばせのはど感涙啻ならず、中にも敎育家小山久和女史の御光臨は一入本會のために祝福すべきことでした。

當日御出席芳名

鶴岡春三郎　神谷吉五郎　野村如連
武村儀市　永江維章　大岡英太郎
磯ヶ谷紫江　高岸拓川　古屋蘭溪
片岡美登　今井爽邦　加藤隆壽
富士の家とした　小山久和　田口荏庵
田村均　篠崎寂星庵

(著到順)

當日の獻立

一御煎茶　麥落雁
一御酒
一御茶碗　鳥賊糝薯　野蜀葵
一酢の物　胡瓜　胡麻
一御鉢肴　玉子燒　卸蘿蔔
一蕎麥　田舍そば　山葵切　茶搔
一蕎麥湯
一甘味　紫紐
一御番茶

例により各位御持寄の御土產抽籤にて配呈、其外特別の御寄贈も品々あつて是亦同時に抽籤配呈。催主よりは奥山第十四發行に付各位へ贈呈。

こゝばかりは不景氣知らずの別天地、陽氣洋々春の海、沖の鷗の羽を伸して談

157
107

笑ざわめくところに、御挨拶に出た藪忠老人相變らず元氣な顔を見せ、興に乘じて根津の宵闇といふ秘話を演じ、隆壽大人は天草商人取引の公式と信州ザルソバの奇習を說き、富士の家としを君も乘出して、淺草橋電車線路で粹筋の手切話一節を演出。えろ〳〵隱藝の蘊蓄を披瀝して一座の賑もを添へられ、幾たびかお膳の宿を轉々させました。

興趣盡くる所なけれど空合も怪しければ、遠方の御歸路を氣遣はれる向から、一人二人と御早立の繰引に、十一時二十分めでたく散會といふことになりました。

來月は本會第二周年記念の催、何かの御趣向もおありでせう。それは一段と樂み、心待ちに待ちますと、御一同笑坪に入つての御別れ……さよなら〳〵。

No.

昭和七年九月廿五日印刷納本
昭和七年十月一日發行

『限定壹百部』

不許複製

奥山第十七

編輯兼發行者　磯ケ谷孝治　東京府和田堀町和泉二四三番地
印刷者　宮西外次郎　東京市麴町區三番町六十九番地

發行所　東京府瀧野川町中里一五一番地　明元社
印刷所　東京市麴町區三番町六九番地　邦文舍